

「救いの目的」

エペソ人への手紙 1 : 3 - 5

August.22.2021

エペソ人への手紙 1 : 3 - 5 (パウロ)

Preface

今朝は、今お読みした聖書箇所の特に 4 節の

エペソ人への手紙 1 : 4 (パウロ)

すなわち神は、世界の基が据えられる前から、キリストにあって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。

という御言葉から、父なる神様のその思いを探っていきたいと思っています。

少し時間が経ってしまいましたが、前回までの学びで、私たちに与えられた救いは、私たちの意思や願いによって成されたものではないということを見て参りました。

私たちに与えられた救いは、神の意思によって成されたものです。

私たちは先に神を求めたこともなければ、私たちが先に私たちの意思で、神に従おうなんて思った試し也没有せん。

神を知らず、自らが神になって、自らの幸福のみを追い求めるところを生きていました。

私たち皆が皆、以前の自分自身を顧みた時、日曜日の朝のこの時間に、自らの意思で進んで喜んで三位一体なる神様を礼拝するために、この礼拝の場へと出てくることなんか誰も考えられませんでした。

時間さえあれば、その時間を自分のことのためだけに使うことに没頭していた者たちです。

しかし神様は、その永遠の哀れみと慈しみと恵みによって、私たちを世界が造られる前からずっと追って来られ、私たちをして、私たちが一体全体何者なのかを自白できるところへと導き、神様の恵みとその呼びかけの前に降伏する者へと造りかえてくださいました。

私たちは今、私たちの決定によって、この場にいるわけではありません。

そのすべてが、神様の意思による選びであり、その意志が成された結果ゆえで

す。

そして、その神の全面的な意思による選びには、目的があります。

その目的が、4節で言う「神の御前に聖なる、傷のない者にしよう」ということです。

Part One

“しよう”という言葉には、神の意志がはっきりと見て取れます。

また、“しよう”ということは、ボタン一つで天から完成品が降ってくるというようなことではなく、時間的漸進性があるということも示唆しています。

私たちに与えられた救いは、救われたことによって罪赦され、滅びることが決まっていた悪しき者から神の子へとその身分が変わったということですが、

それだけではなく、神の子に相応しい主イエスの身丈にまで達する栄光の品性と人格が錬られていくという過程に入れられ、その完成に向かって進むということも意味しています。

ピリピ書の2章に、「恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい」とあり、また第一テモテ6章では、「信仰の戦いを立派に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい」とありますが、

私たちに与えられた救いは、その与えられ神の子とされた身分に寄りかかっていけば、自動的に勝手に膨れ上がってその中身が満たされていくなんてことはなく、走り、戦い、躓き、叩かれ、ケガをし、血を流すことがあっても、また起き上がり、また倒れ、起こされていくという錬られる過程を我が身をもって生き抜くことが、救いでもあるということを教えてください。

この救いの過程を、新しく生まれた赤ちゃんが、色々なことを経験しながら、良いことや喜ばしいことだけでなく、悪いことや痛いことや苦しいことなども含めて、色々なことを経験しながら成長していくことにも、聖書は例えたりもしています。

そして、この救いに達することを、エペソ書1:4では、「神の御前に聖なる、傷のない者にしよう」と表現します。

ただし、皆さんもう察しが付いているように、この「聖なる傷のない者にする」という道程は、一筋縄ではいきません。

相当の覚悟が必要です。

私たちの覚悟ではありません。

神様の覚悟です。

私たち人間側には、神の民として、神の子として生きるという覚悟が明らかに薄いということと、その薄さを補うかのような神様の心の声を記した聖書箇所があります。

イザヤ書48章に行ってみましょう。

イザヤ書48：8（パワポ）

神様はアブラハムを、イサクを、ヤコブを、イスラエルの民たちを選び、神の民とし、神の子としましたが、

彼らが神を裏切ることなんか決していないから、彼らを選んだのではなく、彼ら全員が生まれる前から**必ず**神を裏切る者であるという事実を知ってなお、彼らを神の民とし、神の子とされました。

イスラエルの民たちだけでなく、私たち人間皆然りです。

神を裏切っても、裏切ったことにさえ気付かずに、ひょうひょうと我が物顔で、愛し赦すよりも他者を裁き、自分のことを正当化しながら、いい子ぶりながら、教養があるとか、経験豊かだとか、クリスチャンだと言ってのける厚顔無恥な私たちです。

神様は、私たち人が聞く耳も持たなければ、無知であることを認めようともせず、自ら王となり、自らが自らのオーナーとなって、100%必ず神を裏切る行為を働くということを疾うに知っておられるにもかかわらず、キリストにあって、神の御前に聖なる傷のない者にすると覚悟をお決めになりました。

どれほどの覚悟かと言いますと、神自ら人に裏切られ、踏みにじられ、唾をかけられ、平手で打たれ、血みどろになるまでむち打たれ、人間が編み出した死刑方法の中で最も残酷で、最も長く深い、気絶してしまうほどの肉体的痛みの伴う十字架刑にかかって死なれるほどの覚悟です。

見るも無残に死んだからといって、その死を称賛するどころか理解出来る者なんか一人もおらず、無駄死に、意味不明な死だとまで言われるような覚悟です。

そのような覚悟をもって、神様は、私たちを御前に聖なる傷のない者にしようとキリストにあって選び出してくださいました。

Part Two

ですが、この覚悟の救いの業は、究極的には私たち人のためではありません。神のためです。

イザヤ48：9－10（パワポ）

神が神であられるということ、愛なる神が愛なる神であられるということ、結んだ約束を破ることなく、必ずや成し遂げる誠実な神が誠実な神であられるということ、当然の事実としてお示しになるという意味のもと、人をお救いになりました。

私たちは、私たちの救いが無償で与えられた救いであるにもかかわらず、その救いを私たちのために、私たちのためにと、その救いゆえに遜り、人を愛し、神を愛すのではなく、自らを誇るために、自分という人の正しさを示すために利用しようとしています。

イエス・キリストを信じる前は、自らを自慢しようと生き、イエス・キリストを信じてからは、その信仰を、自らを誇るために用いようとしています。

救いという、天地万物をお造りになった神という、愛に富みたもうイエス・キリストという、神の言葉という高尚で、ハイツで、格式高い印象のある武器を手に入れたと、その武器で人をバッサバッサと切っていくながら、自分の正しさを、自分自身と人に見せつけようとしています。

福音書を見ますと、「我々の父は、あのブラハムだ！」と誇る者たちに対して、イエス様は、「言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです」と返ししながら、何の価値もない石ころのような誇りを、信仰の名のもとに持ち続けることの無意味さを厳しく問いいただきました。

私は牧師だぞ！ 私は信仰歴が長いんだぞ！ 私は信仰歴ばかりか、学歴も、職歴も、家の出も良く、1代目2代目3代目4代目5代目クリスチャンなんだぞ！ 私は年上だぞ！ 私は若いのよ！ 俺は父親だぞ！ 私は子を持つ母親よ！ もうなんだって、信仰の名のもとに自慢のネタになって、人に共感し、受け止め、理解し、赦す代わりに、見下し、裁き、そこから来る優越感を信仰だと錯覚するような者が私たちです。

だから神様は、ともすると神の誇りを自分の誇りにすぐ変えようとする私たちのためではなく、究極的に神様ご自身のために、神様のご性質である聖であり傷のないという属性をただただ恵みとして、私たちに与え、その恵みの中身を満たそうと意思をもって導いて行かれます。

救いは私たちのためではなく、究極的には、神のためです。

神が神であられることを、必ず裏切りを働くような私たち罪人を御前に聖なる傷のない者とされることを通して、太陽が東から昇ってくることが当たり前である以上の当たりの神らしさが当然のように表れるのです。

ここに私たちの栄光があります。

神様は、神様お一人で、上にも下にも、天地万物・森羅万象何ものをもってしても到底収めることなんか出来ない栄光の所有者、源であられる方が、私たちを救い、その救いを完成させることをもってして、ご自分の栄光を表すと思意をもってお決めになりました。

私たちを神の栄光の相続者、同伴者、同居人、その方のうちに私たちがあり、私たちの内にその方がいてくださること無くして、神自ら、神のご栄光をお認めにならないとお決めになったのです！

ここに、私たちの栄光があります。

私たちが優れているからとか、私たちが何かを成し遂げたからとか、私たちが競争をして勝ったからとか、何かを突破したからとか、何かを発見したから栄光があるのではなく、

神が、私たちをご自身の栄光に引き入れてくださった事に、私たちの真の栄光があります。

Part Three

ただここで、最大の問題が一つあります。

それは、神様の何をもってしても推し量ることなんか到底できない覚悟のうちに成された「神の御前に聖なる、傷のない者にしよう」という栄光の救いの業のすごさについての私たちの理解が、止め処もなく浅いということです。

だから、この最大の問題のために、パウロは祈るんです。

「頼むから、この偉大で、巨大で、豊かで、富んでいて、比較できるものなんか何一つない祝福だということを理解できるように」と祈るんです。

以前も見ましたが 17 節からの言葉です。

エペソ人への手紙 1 : 17 - 19 (パウロ)

なぜ、このような祈りをしなければならないのかと言いますと、「神の御前に聖なる、傷のない者になる」ことの意味が分かっていないだけでなく、

「神の御前に聖なる、傷のない者になる」ことが、私たち信仰者の目的や目標になっていないからです。

私たちは、救われキリスト者となってもなお、神様の御思いを探り従っていくことをもって信仰だとはせず、どれだけ願いが叶い、どれだけ所有が増し、どれだけ子供が良い大学に進学し、どれだけ自分の思い通りに事が運び、どれだけ癒されたのかというご利益をもって、信仰を計ろうとし、信仰の目標とします。

もしくは、これだけ一生懸命聖書を読んだのだから、これだけ無我夢中になって祈ったのだから、これだけ熱心に奉仕をしたのだからという宗教的な行動だけをもって、信仰の度合いを計ろうとします。

もう少し平たく言いますと、私たちは、信仰の究極的な目標を、この地上での幸せと喜びにしています。

しかし、神様の意思で、世界の基が据えられる前からキリストの内に選び出した永遠の目的と目標は、“聖なる者にする”ということです。

“聖なる”が、神様の目標であり、目的です。

神様は私たちを、この地上で幸せにするために、または喜ばせるために救い出したのではなく、“聖なる者”とするために救い出しました。

もっと言いますと、“聖なる者”となるように追い込み、導かれます。

これを理解しないことこそが、私たちの信仰生活における最大の失敗の要因です。

これを理解しないと、いつまでたってもいちいち信仰をもって躓き、倒れっぱなしで、主と共に起き上がろうともせず、「もういいよ！」となってしまう。

神様の目的が“聖”であるため、神様は私たちを洗濯機にぶち込んで、回すことがあります。

私たちの虚無で空しい欲を取り除くために、挫折させ、へし折る時があります。

幸せや喜びとは程遠いように思える、嵐のような、全く光が射さないようなところを通らされることがあります。

もちろん、挫折しっぱなしにならないように、癒してもくださいますし、慰めてもくださいます。

良くやった時には、「良くやった忠実な僕よ！」と褒めてくださるように、悪い部分においては、無用な願いや思いを取り除くために神様の介入はなければならず、だから、私たちの人生には、泣きっ面に蜂のような場面があるわけです。

自ら進んで勉強したいと思う子供がいないように、自ら進んで“聖なる”生き方をしたいと思うキリスト者が中々いないからですね。

叱られないで、怒られないで、失敗しないで言うことを聞く人なんか、誰一人としていません。

皆が皆、「あ、怒られる」「あ、失敗する」と恐くて、思い直し改めるのであって、それが良いことだからと言って、思い直し改める人はいません。

どれだけ人間そうなのかと言いますと、神様がダビデの子孫たちを導く時、「わたしは杖と鞭をもって懲らしめながら導く」と仰った程にです。

そうして、初めて、人は、“聖なる”ということを求めていくようになります。

「そんな消極的な動機でいいのか」と思われるかもしれませんが、人間そんなに賢くもなく、強くありません。

「こんなんでいたら、神様に叱られる、また洗濯機に入れられちゃうよ！」という恐れを持って悪さを辞めることは、賢いことです。

「警察に捕まるなんて、弱っちいこと言わないで、まあまあ一杯やってけよ」という言葉に乗らずに、一杯やらないことは、弱っちくて恐れているのではなく、分別力があると言います。

「赤信号みんなで渡れば怖くない」と言って、ビュンビュン車が行き交っている交差点を渡っていくことは、恐れを知らないのではなく、分別力がないと言います。

“恐れる”ことは悪いことではありません。
真っ当な“恐れ”は、分別力となります。

スイスの精神科医であったポール・トゥルニエは、こんなことを言っています。
「神様は、私たちが神様の元へ戻れるようにと、また、私たちがどれだけ可哀そうで、哀れな存在であるのかを気付かせるために、私たちの心の内に、恐れるという思いを植えてくださった。」

神を恐れるという分別力は、人を“聖なる”生き方へと方向転換させる決心へと繋がります。

Part Four

では、聖書の言う“聖なる”とは何でしょうか？

以前、“聖なる”とは、“区別された”ということの意味とお話ししましたが、どういう意味で区別されているのかと言いますと、

世が教えるこの地上での幸せや喜びを満喫することを人生の目標とし、時間も空間も所有も肉体もすべて自分のために使い、自分中心に生きていたところから、

神様との関係が回復し、正常化し、神様をほめたたえ、神様の御思いを求め、神様の恵みと栄光と哀れみがなされるために、自らをその手段として神に献げる思いと姿勢になるということにおいて区別されたということです。

つまり、生きる世界が変わったということです。

この「神様との関係が回復し、正常化し、神様をほめたたえ、神様の御思いを求め、神様の恵みと栄光と哀れみがなされるために、自らをその手段として神に献げる思いと姿勢」という“聖なる”を体現された方が、イエス様です。

では、イエス様が体現されたことって何ですか？

愛ですね。

では、愛とは何ですか？

コリント人への手紙第一 13：4－7（パウロ）

イエス様は、私たち、賢くもなく、強くもなく、ずるくて、卑怯で、未成熟で、破壊者で、人を愛するよりも傷つけ、人を人格としてではなく道具と見なし、人を踏み台にし、自分の快樂のために人を利用し、神との関係が断絶しているような無用者となった私たちに、寛容で、親切で、妬むこともなく、

また、ご自分が神であると、聖なる者であると自慢もせず、高慢にもならず、ご自分よりも優れた者だと、尊い者だと言って下さり、こんなどうしようもない者たちにも、礼儀を尽くしてくださいました。

さらにご自分の利益をすべて分け与え、苛立つどころか「大丈夫だ」と安心させてくださり、抱擁までしてください、唾をかけ、平手で打ち、この手でイエス様を十字架に架けたことなんか露知らない悪を心に留めることもなく、

私たちのすべての悪さと欲を忍耐し、信じ、望みまでかけてくださいました。

これが愛です。

そして、愛こそ、“聖なる”の本体です。

神は、私たちをこの愛に生きる者へと変えると、決心されました。

愛こそ、人生の目標であり、目的であり、最も価値あるものであります。

そして、それを実践する者へと、私たちを追い込んでいきます。

追い込まれでもしなければ愛そうとしないのが私たちであり、追い込まれながら実践した愛にこの上ない価値と喜びを経験すると、今度は自らの意思で、イエス様に倣って、愛したいと思うようになり、愛を練習し、愛を実践し、愛に生きようとしています。

そうして、私たちは、その愛を練習する場として人生を捉え、愛の実践を日々の目標とし、「あの人がダメだ！ この人がいけない！ 目の前にいる人が悪い！」のではなく、「私がダメで、私がいけなくて、私が悪い」ということを感謝のうちに練習し、気付いていきます。

「あの人とは考えが違うから、あの人とは馬が合わないから！」と、「自分だけ聖なる傷のない者にしてください」と願いたくなる思いを改める練習をするんです。

これが聖なるということであり、神のなさる救いの目的です。

Conclusion

私たちは、私たちが決断を下して、この愛なる聖なる場へと出て来たわけではありません。

そして私たちはやがて、私たちの思いとは全く関係なく、神の前に傷ひとつない聖なる者として立つことになります。

私たちキリスト者の“聖なる”とは、罪を犯さない事でもなければ、有識者になることでもありません。

至って人格的で、至って人の品性に関することです。

神を愛し、人を愛すことです。

父なる神様は、今日も悪人にも善人にも、太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる方です。

「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われる神様は、今も、すべての人に、一人残らずすべての人に思いやりと恵みを施し、お救いになることを喜ばれ、そのために眠ることなく、まどろむこともなく、働いておられます。

神様とは、そういうお方です。

そして、私たちは、そういうお方の“聖なる”を求め、実践し、練習し、生きていくのです。

人を裁くことをもって“聖なる”を表すのではなく、愛することをもって“聖なる”を表す生き方が、私たちのキリストの内にあって変えられた運命だと知り、その導きに従ってついていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ書 13：10